

未来派イデオロギーの根本的矛盾 について

重岡保郎

はじめに

未来派イデオロギーとは19世紀末遅れて産業革命に乗りだした後進的工業文明に固有のエネルギーな文化形態の一つであり、運動の母国イタリアでは端的に技術崇拜のイデオロギーであったといえる。周知のように1909年パリの文芸紙「フィガロ」に発表された創立宣言¹⁾によって、はなばなしく出発したこの運動はF. T. マリネッティの自由詩の運動を軸としながらも最初から政治的志向をもつ総合的文化運動であった。第一次大戦中から終戦直後の時期にかけて未来派運動の重心は圧倒的に政治に傾き、芸術プロパーの領域では見るべき成果を殆ど生み出せない低迷が最後まで続いたようである。ただし総合的運動としては最初の前衛運動として、未来派はその後の前衛運動（表現主義、ダダ、シュルリアリズム etc）への刺激的媒体ないし酵素として否定できない役割を演じた。²⁾

筆者はかつて、政治運動としての未来派がファシズムの形成にどのように具体的に関わったかを取りあげたことがあるが、種々の事情から未完に終わった。³⁾ 本稿は続編としては当時未完成であった草稿を今回修正・加筆したものである。従って、すでに扱った未来派とファシズムの政治的関係には殆ど触れていないが、イデオロギーの面での両者の関係は本稿の重要な検討課題である。旧稿を修正し、かつ論題も変更したため、やや焦点がぼけたきらいはあるが、本稿はあくまでもファシズムの思想的源泉を究明するために未来派のイデオロギー

——根幹となるイデオロギーの構造とその矛盾——をとりあげたもので、芸術プロパーの研究ではないことをあらかじめおことわりしておきたい。

I ダイナミズムと機械文明

マリネッティにとってダイナミズムは未来主義(Futurismo)の異なる表現であった。1908年10月11日、彼は自分が主宰していた詩の国際雑誌「ポエジーア」の同人たちと新しい運動方針について討議した。彼らは、1905年に同誌を創刊して以来、もっぱら自由詩の運動を推進してきたが、この時点で自分たちの運動が生活のダイナミズムを表現していないことに気づいたのである。この討議でマリネッティは、新しい運動のスローガンとして「ディナミズモ」と「フトゥリズモ」のいずれを選ぶべきか迷った末に後者に決定したと、後年述べている。⁴⁾

つまり両者は根本的見地において殆ど同一なのである。⁵⁾そして、このディナミズモ、つまりダイナミズムは、彼らが崇拜する機械文明に固有の力動感の端的な表現であるとともに、世界を不断の運動と生成と見るヘラクレイトスの視点でもある。このような視点からマリネッティやフォルゴーレの機械は生きていると見るフェティシズムが生じたと思われる。⁶⁾

未来主義がダイナミズム、つまり動性あるいは運動の観点に対応するとすれば、未来主義の対極である過去主義(Passatismo)は不動性あるいは静態的観点に対応することになる。事実、マリネッティはこの図式化を肯定するような説明を随所で試みているが、創立宣言でも次のように書いている。

「文学はこれまで不動性、恍惚、眠りを讚美した。われわれは攻撃運動、不眠、駈足、とんぼ返り、平手打ちを歌おう」と。

マリネッティは、仏伊のサンボリズム、とくにマラルメとランボーの影響を強く受けたサンボリストとして19世紀末から仏伊両国で詩人の活動を始めていた。ランボーの「見者の手紙」の精神は創立宣言のなかにもうかがえるが、ここでは「絶対に現代的であること」「生活を変えること」という彼の格言的信

条がマリネッティと未来派の指針であったことだけを指摘しておく。⁷⁾

未来主義は機械文明の生みだした新しい世界にあこがれる現代崇拜(modernolatRIA)の芸術的表現であったといわれる。しかしこの現代崇拜は、おそらくイタリアの後進的環境のために人間と技術の矛盾を無視した技術崇拜あるいは技術万能主義を伴っており、この技術万能主義は生産力理論と並んで、むしろそれ以上に機械美とスピードの美を総合したダイナミズムの美的感覚に基づいていた。

マリネッティによれば、「未来主義は偉大な科学的発見のおかげで人間に生じた感受性の完全な革新に依拠する」⁸⁾と規定されるが、この「感受性の完全な革新」は、駅馬車と自動車のスピードの相違に端的に示されるスピーディでダイナミックな感覚であると同時に、「爆音をたてて走る自動車」は「サモトラケの勝利の女神より美しい」(創立宣言)という美意識に結びついていたことは確かである。従って未来主義における生活変革の志向はもっぱらダイナミズムという美意識を伴った動的観点からとりくまれることになる。

1914年末にマリネッティは全イタリアの学生に参戦を呼びかけるアピールを起草したが、そのなかで未来派の誕生をこう説明している。「イタリアは他のどの国よりも未来主義を緊急に必要としていた。というのはこの国は過去主義の重圧によって死に瀕していたからである。病人は独特の療法を発明し、われわれは偶然その医者となった」「われわれの直接的プログラムは次のような不愉快な形でイタリアに存在する過去主義との熾烈な戦いである。すなわち、考古学、アカデミズム、老人主義、ことなかれ主義、卑怯、平和主義、ベシニズム、ノスタルジー、センチメンタリズム、性愛的偏執観念、外国人産業。」⁹⁾つまり、この運動の直接的目標は過去主義の打破であったが、未来主義という言葉自体が示すように、それは終局的目標でもある。というのは過去主義はここに挙げられたものにとどまらない無限の広がりをもつ観念だからである。

E. ジェンティーレはファシズム・イデオロギーの古典的ともいえる研究書のなかで、「未来派イデオロギーの核心にあるものは未来へ向かう運動としての生命の観念であった」と指摘している。¹⁰⁾もしこの指摘が正しいとすれば、このよ

うな「生命の観念」と相容れないものはすべて過去主義として弾罪されることになる。しかしいづれにしても未来派の闘争が過去主義に対する永久闘争であったことは確かであり、この闘争が後年グラムシやトロツキーの評価を受ける未来派の文化革命に発展したのである。¹¹⁾

なお未来派運動は1909年以降、ミラノとパリで同時に進められたが、パリの運動がミラノの場合のように政治化しなかった主たる理由が前近代性の希薄さにあったことがマリネッティの説明から理解できる。この意味でイタリアとロシアの未来派運動は客観的には工業化と都市化を求めるラディカルな文化—政治運動であったといえよう。¹²⁾ 工業化と都市化の点で、ほぼ同時代のドイツ表現主義運動は対蹠的であったように思われる。¹³⁾

未来派は創立宣言では図書館や美術館の破壊を主張し、大戦後には復員兵士の経済的救済のために国宝的美術品の売却を提唱したりしたが、しかし彼らにとって過去主義との戦いの本質は過去の芸術や文化遺産の破壊と排除にあったのではなく、過去の文化や芸術に対する社会的通念の打破、つまり人々の意識の变革にあった。マリネッティは、1915年に出版された評論集のなかで、未来主義とアナキズムの相違について、アナキストが社会的政治的要求にとどまっているのに対して、「われわれは、さらに……人間の頭脳に植えつけられた最も深い根をひきぬいて焼き捨てようとする」と述べている。¹⁴⁾ つまり、きわめて根深い伝統的な習性や意識を問題にしているわけである。このような通念と習性を代表する家族制度と結婚制度および教会に対する闘争の視点については別の所で述べた¹⁵⁾ので、ここでは未来派の反アカデミズムをとりあげてみよう。

II 未来主義の哲学的基礎

マリネッティのアカデミズム批判はやはり芸術の領域から始まる。創立宣言では、芸術家の夢を表現していない古い絵画を讚美し、それを模倣することを教えるアカデミーや美術館は学生たちの創造的感性を枯渇させるから有害であり、そもそも「芸術は教えられない」とされる。しかしこの宣言においても

イタリアの「悪臭を放つ壞疽」として「大学教授、考古学、術学のおしゃべり」が弾劾されていることを考えると、彼の反アカデミズムは芸術分野にとどまらず、社会的通念や伝統的意識を権威づける過去主義の理論的牙城としてアカデミズム一般を問題にしていることは明らかである。1914年末の「学生へのアピール」で彼はこう述べている。

「この30年間にヨーロッパは不快な知性主義に感染してしまった。社会主義的で国際主義的なこの知性主義は精神と肉体を分離し、あきれるような知的異常肥大を願望し、侮辱に対する許しを教え、諸国民のあいだの憎悪は思想闘争におきかえるべきだとして世界平和と戦争消滅を予告している。ドイツ生まれのこの知性主義に対して未来主義は本能、力、勇気、スポーツ、戦争を賛えながら突撃した」と。¹⁶⁾

このドン・キホーテの攻撃目標にされたドイツ生まれの知性主義こそ、マリネッティと未来派が最も批判するイタリア・アカデミズムの思考方法であった。¹⁷⁾ 本能と知性の対置は表現主義にも共通にみられるが、表現主義がニーチェの思想的影響を最も受けたとすれば、イタリアの未来主義はベルクソンの影響を最も蒙ったといえよう。マリネッティのこの反知性主義と本能肯定思想は、ヨーロッパ文化の「悲劇の誕生」をディオニュソスの文明の否定のうえに構築されたソクラテス的主知主義のうちに見るニーチェ思想の軌道上に求めることもできるが、マリネッティへのニーチェの影響は間接的だったことが現在では確認されている。¹⁸⁾

芸術分野でのマリネッティのアカデミズム批判の素地は、すでにフランスのサンボリストとベルクソンとによって準備されていたが、この点ではマリネッティたちが圧倒的にフランス文化の影響下にあったことを考慮に入れる必要がある。¹⁹⁾

未来派の理論的中枢はマリネッティとポッチョーニである。彼らは、詩と美術のそれぞれの領域で運動を理論的に代表しただけでなく、全体のイデオロギーの面でもほぼ一致した最高指導者であった。しかしマリネッティが非常に尊敬したといわれるポッチョーニは戦場で事故死した。

ポッチョーニの美学の根本的諸概念がベルクソンから直接踏襲されたことは確認されている。1914年に「ラチェルバ」誌に発表された「絶対的運動—相対的運動—ダイナミズム」という論文で、ポッチョーニは、客体を、周囲の環境との相対的運動と客体内部の絶対的運動の二つの観点からとらえる「造形的ダイナミズム」の手法を主張したが、これは「対象の周囲をまわる」相対的認識（分析）と「対象の内部に入り込む」絶対的認識（直観）の統一というベルクソンの認識論を造形美術にそのまま適用したものである。²⁰⁾ デ・ミケーリによれば、ポッチョーニの用語の大部分と彼の中心的思想はベルクソンからとったとされる。すなわち「ポッチョーニは、ベルクソンから持続の概念、つまり生成あるいは発展としての現実の内部的概念と、現実を運動において全体的に把握する唯一の方法としての直観の概念といった一連の根本的 개념を踏襲している。²¹⁾

マリネッティの場合には、独創性を誇る彼の船晦齋²²⁾のためにポッチョーニほど明白ではないが、やはりベルクソンの影響は否定できない。デ・マリーアによれば、²³⁾マリネッティにとって物質とはベルクソンのいう「イマージュの総体」²⁴⁾であり、彼の「自由語」の発想もベルクソンから直接得たとされるが、私見によれば、過去主義と未来主義の対置そのものさえベルクソンの発想に負っているように思われる。

ベルクソンは、運動する実在の認識において時間を空間化してこの実在をとらえようとする悟性の概念的分析によっては運動そのものは把握されず相対的認識にとどまるが、その実在のうち身をおく直観的方法によってのみ絶対的認識に到達すると主張する。このように対置された直観的認識と悟性的認識をマリネッティはそれぞれ未来主義と過去主義との認識論にとりこんだといえないであろうか。ベルクソンのこの主張を敷衍すれば、空間化された時間とは持続を排除した時間、つまり「時間の仮想的停止点」にすぎず、知性や悟性はこの「停止点」において既成のカテゴリーの網のなかに実在をすくいあげようとするから「成った実在」はとらえられても「成りつつある実在」は漏れてしまう。ベルクソンはこの回顧的な悟性の論理を生命をとらえきれぬ決定論として

しりぞけるが、マリネッティも「懐疑的、悲観的決定論に創造的直観の教義を対置」する。²⁵⁾ マリネッティとベルクソンの関係を厳密に検討することは不可能だが、基本的な対応関係は明らかであろう。すなわち、過去主義の基本的方法は概念的分析的方法であり、未来主義のそれは直観的方法であるという枠組においてである。従ってこの対置が未来主義のアカデミズム批判の原理であるといえよう。

さきの「学生へのアピール」でマリネッティは次のように言う。

「われわれはベルクソンとともに生命が知性を包囲すると信じる。つまり生命は氾濫し、ちっぽけな知性を包囲し、それを圧殺するのである。生を生きぬくことによって未来に協力するのだから近い未来も直観しえない。ここからわれわれの暴力的で攻撃的な行動への愛が生まれる」と。

ここには重要な二つの問題がある。ベルクソンは『創造的進化』のなかで、「生命は知性の手から溢れでる」とか「直観は精神そのものであり、ある意味では生命そのものである」と言っているが、直観から分析に移行するがかりで知性の役割を認めており、これを「圧殺」しようなどとは考えなかった。この文章においてマリネッティの反知性主義は極端な非合理主義に転化している。またベルクソンは直観的方法を反省による理論的活動と考えて行動主義に短絡させなかった。尤も、動く実在のなかに身をおく彼の直観的方法は「共感」とも呼ばれるが、それは決して瞑想ではなく——少なくとも社会学の領域では——行動と不可分のものと思われる。1910年にソレルはこう書いた。「よく判断するためには人は運動に身を投じ、知的共感をわがものとしなければならない。さもなければ人は事態の根底に達することができないだろう」と。²⁶⁾ ソレルにあってはベルクソンの「共感」は行動主義的に解釈されたようである。このような直観即行動の論理にはプラグマティズムが媒介的役割を演じており、この点でベルクソン——ジェームズの相互補完的役割が問題となるわけだが、この役割をイタリアで果したのがパビーニである。ともかくベルクソンの直観主義は未来主義とファンズムに共通な行動主義の思想的前提であったといえよう。²⁷⁾

第Ⅰ節でダイナミズムをヘラクレイトスの視点としたが、少なくともマリネッティにあってそれは運動する実在を排他的に直観によってのみとらえようとする態度または方法とするのがより正確であろう。こうした未来派の単純化された非合理主義から端的に「本の敵」と自称する彼らの反知性、反哲学、反文化の態度が機械的に導きだされる。これはファシズムに継承された行動主義の一面である。タスカはファシストの思考態度について「私は考えない、ゆえに私は存在する」と皮肉をこめて書いた²⁸⁾が、この態度は未来主義に直接由来するとしても、「私は持続する、ゆえに私は存在する」というベルクソンの発想と無関係ではないのである。

マリネッティは、「統語法の破壊、無線の想像力、自由語」という1913年の有名な論文においてこう述べている。

「……抒情性とは生に熱中し、われわれ自身の生を酔わせる稀有の能力のことである。それは、われわれを巻き込んで混乱させる生活という汚水をブードー酒に変える能力である。……強烈な生の領域（革命、戦争、難破、地震等々）におかれたとき、抒情性の能力に恵まれた人が話す場合を想像してみよう。彼は統語法を乱暴に破壊することから始めるだろう。文の区切りを構成する余裕を彼はもたないだろう。句読点や形容詞をつけることに気を配らないだろう。彼は言葉の繊細な彫琢やニュアンスを無視し、緊迫した成り行に依拠して、視覚、聴覚、嗅覚がそれぞれ感じたことを息をはずませて力強く吐きだすだろう。情感噴出の激しさは段落の導管、句読点の弁、形容詞の調整ボルトを吹きとばすだろう。因襲的秩序にいささかも捉われぬ本質的な言葉がつかみとられるだろう。語り手の唯一の関心は彼自身を完全に震わせることである……この簡潔な表現の必要はわれわれを支配しているスピードの法則に対応しているばかりでなく、民衆と詩人のあいだの数世紀にわたる諸関係にも対応している」²⁹⁾

ここには1913年以後、それまでの自由詩に代って未来派詩人の運動の中心にすえられた自由語の原理的考察が見られるが、作詩上の技術的問題³⁰⁾を別とすれば、原理自体はとりわけ新しいものではない。それは詩の領域ではマラルメなどのサンボリストによって、哲学の領域ではベルクソンによって追究された

言語に対する根本的反省・検討の域を出るものではないだろう。それは交換価値しかない紙幣のような言語に使用価値を担う新しい言語表現を対置することであり、「音楽の富を文学に奪還する」というヴァレリーの言葉に要約できるように思われる。³¹⁾そしてこれは未来派の過去主義と未来主義の対置にも対応する。未来派の新しさは、このような問題提起を大胆に、文法を破壊するような極端さで実験に乗り出したことだが、詩と文学においてそれは理論にとどまり、すぐれた作品として結実するには至らなかった。³²⁾

しかし政治の領域においてその適用と実験は予想外の成功をもたらしたといえる。政治的にはディレッタントにすぎなかった未来派の幻想的な問題提起を継承し、現実的な形に仕上げる能力をもった職業的政治家が存在したからである。それがムッソリーニであったことは言うまでもない。³³⁾

マリネッティのこの文章は激動における人間の抒情的あり方を示唆するものでもあるが、このような生のあり方はベルクソンの言う「思考される前に感じられ生きられた真理」の探求であり、おそらく「純粹持続」あるいは「自由」と呼ばれるものであろう。³⁴⁾このような生のあり方は1910年ごろからイタリアの知識人や青年学生のあいだで広範に論議的になっていた。「危険に生きよ」というニーチェ＝ダヌンチオの流行語がすでに土壌を準備していたが、1909年に伊訳が出て争って読まれたというソレルの「暴力論」はその序文でベルクソンの二つの自我を紹介しているからである。二つの自我とは何か。

それは社会的通念に生きる「表面的自我」と純粹持続に生きる「深い自我」である。前者は後者の社会的疎外形態で、自分に対して外的であるから行動するのでなくて行動させられている。後者においてはじめて人は自分をとりもどし、自由に行動することができるというのである。³⁵⁾

二つの自我とは別の角度から単純化して表現すれば、意識と潜在意識ということになる。革命のような大事業は大衆の意識だけでなく潜在意識まで総動員しなければとうてい達成できない。ベルクソンから深く学んだ若きグラムシは大戦後、この総動員体制——だが潜在意識を階級意識に昇華する方向の——を工場評議会において構想したと思われる。ファシズムは逆に意識まで潜

在意識化する方向（信念）で総動員体制を構想する。その極地が戦争である。それは、マリネッティ流に言えば、「彼自身を完全に震わせる」抒情的生き方の極地でもある。³⁶⁾

III 未来派の戦争観

マリネッティと未来派の戦争論を扱う場合、創立宣言第2部第9項をまず検討しなければならない。その全文は次の通りである。

「われわれは、戦争——世界の唯一の健康法、ミリタリズム、愛国主義、無政府主義者の破壊行為、殉死を招く美しい観念、そして女の軽蔑を賛美しよう。」

有名なこの第9項はロシアとイタリアの未来主義を分つ最大の分岐点であり、³⁷⁾それゆえに後者の特徴的本質を示すものである。一見して脈絡のない標語の羅列と思われるが、少なくともマリネッティの思考のなかでは関連のある標語なのである。後年の彼の説明³⁸⁾に基づいてその内的関連をたどることから始めてみよう。

第一に、愛国心と戦争はともに自由を求める無政府主義の理念と矛盾するのではないかという疑問に彼はこう答える。「集団と個人という表面上矛盾する二つの実体は緊密に相互浸透している。集団の発展は実際、個人の努力と創意の結果ではないだろうか。従って国民の繁栄は、それを構成する多種多様の組織の対立と競争によって生みだされるのである。同様に諸国民のあいだの工業的、軍事的競争は人類の進歩に必要な一要素である」と。

ここにはダーウィンの生存競争の観点があるが、それと並んで祖国を家族の延長ではなく、「個人の最大の延長」とみる愛国的個人主義の視点がある。その意味で戦争はマリネッティにとって最大の無政府主義的破壊行為なのである。市民的英雄主義を鼓舞し市民社会を強化する限りで、その破壊行為は国家を革新し健全化すると彼は考えたのであるが、このような混沌とした国内の矛盾をかかえて総力戦である戦争が戦えないことをナショナリストもファシストも知っており、この無政府主義的個人主義がのちに否定されたことは別のとこ

ろ³⁹⁾ですでに述べた。ナショナリストが勝利という結果を重視したのに対し、過程を重視するマリネッティにとって勝利は至上問題ではない。⁴⁰⁾彼にとって戦争は美であり、そこには滅びの美学さえある。「殉死を招く美しい観念」はこの美意識と結びついている。とにかく、未来主義者は絶対的個人主義者で全体主義者ではないのである。その意味で「ミリタリズム」は、いわゆる軍国主義のイメージからは遠く、危険に身をさらす市民的英雄主義の全面的開花を指すものと思われる。

第二は戦争と「女の軽蔑」の関連である。これについては次のような彼のコメントがある。「われわれは世界の唯一の健康法である戦争……殉死を招く美しい観念と女の軽蔑をたたえたが、それは恋と宿命の女に悩む若者たちをその岸辺にひきつけるダヌンチオの感傷主義という文学の沼への恐るべき、だが必要な投石であった」(省略点は原文通り)。⁴¹⁾マリネッティにとって軽蔑すべき女とは、「愛の理想的で神的な唯一の保持者としての女であり、毒薬のような女、悲劇的玩具としての女、偏執的で宿命的な弱い女」であり、一言でいえば「愛(amore)の暴君」としての女であって婦人一般ではない。⁴²⁾

未来主義者が人間の最も根深い古い意識の根絶をめざしたことはすでに述べたが、最も根深い意識とは性の意識である。「われわれは——と彼は言う——人間の前進を阻むこの恐るべき重圧である愛を軽蔑する。それは、人間が人情から脱却し、自己を増大し、自分自身を克服して、われわれのいう拡大された人間になることを妨げるからである。」⁴³⁾彼にとって、青年のエネルギーを蕩尽するこのロマンチックな偏執と逸楽の愛はダヌンチオのような詩人の創作物にすぎず、センチメンタリズムと淫蕩であるこの愛ほど世の中で不自然なものはないのである。従って、一方ではこのセンチメンタリズムと神秘性を愛から剝ぎとり、愛を自然なものにすること、つまり種の保存のための性交という散文的で、飲食同然の単純な肉体的機能に還元するとともに、他方では愛を「機械とスピードへの愛」、危険と闘争と市民的英雄主義への愛、さらに愛国心と戦争への愛に転化することが必要となる。⁴⁴⁾

マリネッティの思想には、タルコット・パーソンのいう「男性的文化」を予

告するものがあるといわれるが、⁴⁵⁾ここでは青年の性的エネルギーを戦争のために組織しようとする志向が最も問題であろう。

以上の観点を念頭において、次に「世界の唯一の健康法」の意味を検討してみたい。

『未来派民主主義』（1919年）において民族の生命を個人の生命に擬して戦争は大規模な灌水や刺絡に相当すると説明した⁴⁶⁾マリネッティは、それ以前の「学生へのアピール」では、「戦争は生の法則だから消滅しえない。生＝攻撃、世界平和＝民族の老衰と断末魔、戦争＝国民の力の血腥い必要な認定」さらに戦争を「芸術の唯一の靈感としての、唯一の道徳的浄化としての、人間パスタの唯一の酵母としての戦争」と規定し、「戦争だけが人間の知性を若返らせ促進し鋭くし、神経をやわらげて活気を与え、低能者に才能を与える」と述べ、「戦争は、過去主義者が希望するように戦争を減さないで過去主義を減すだろう」と戦争の未来主義的性格を力説している。⁴⁷⁾

この説明にみられる未来派の戦争観は、第1に「生の法則」としての戦争であり、第2に民族を活気づけ若返らせるものとしての戦争であり、第3に過去主義を撲滅するものとしての戦争である。以上が「世界の健康法」としての戦争の論理であると思われる。戦争を生のあるわれとし、平和を「民族の老衰」とする論理の基礎には、運動が常態で不動ないし情性的運動は（自発的）運動の退化・衰弱であるというベルクソンの観点がある。マリネッティには、一切の過去主義は不動と情性のうちに安眠しているから戦争という最大の激動——国民総動員の運動状況——が起れば過去主義は吹きとんでしまうという楽観的発想がある。事実、彼は戦争状態において、人間は「センチメンタリズム、女性的繊細さ、上品さ」といった過去主義的態度や意識を捨てざるをえないし、「明日なき自由恋愛の形態」を選択せざるをえないと述べている。⁴⁸⁾戦争における戦士のあり方が未来主義の人間像の模範であるといえる（この点でコロンタイなどの自由恋愛論とは全く異なる）。また戦争において重苦しい準備を要する分析的方法は即興的直観的方法に対抗できないというのが、⁴⁹⁾これもまた分析に対する直観というベルクソンの観点から出ている。さらに戦争は「生の充満

であり、祖国への献身における最大の自由」であるという彼の指摘⁵⁰⁾はやはりベルクソンの自由の発想から出たものであろう。前記の自由語の原理についての一文を考え合わずならば、マリネッティにとって戦争は戦士に純粹持続を保証し、その限りで彼に自由を与えるものといえよう。しかしこの祖国への献身における自由の発想には奇妙な人種論や後年のファシズムの反個人主義と区別しがたいものなどの全体主義的諸契機がある。

マリネッティの戦争観はドイツの作家 E. ユンガーの見解⁵¹⁾に類似している。このユンガーに代表される戦争論を踏まえて R. カイヨワは、文明が抑圧した人間の本能を充足させ、「それによって社会の周期的な若返りを模索する」古代の祭の機能を現代の戦争のうちに見出している⁵²⁾が、未来派の国民再生の戦争を古代の祭と比較できるであろうか。

「われわれは歌いながら踊りながら戦争に行く」というマリネッティの言葉(1910年)が端的に示すように、未来派の戦争観には確かに祭の要素があり本能の一大解放があって機能上の共通性はカイヨワの言う通りであろう。⁵³⁾しかし古代においては、祭は周期的ではあっても継続的ではなく断続的であり、あくまでも一時的な「社会の発作」にとどまって、いわゆる社会変革と結びつかないのに対し、未来派にあっては、内外の「発作」は恒久的で、いわば無窮動の観を呈し、戦争は彼らのいう「革命」と結びついている。すなわち戦争は国際的にも国内的にも過去主義打倒の「革命」であるが、主として対外的「発作」である戦争が終ったあとでも、「革命」の完成のために国内における「社会の発作」は日常的英雄的的市民によって不断に継続されねばならないのである。この「社会の発作」が初期ファシズムに継承された「武装行動主義」(squadrisimo)⁵⁴⁾であったことを改めて確認しておきたい。

IV 技術文明と人間疎外

カイヨワは、すでに述べたように、マリネッティを比較の対象にしているわけではないし、もっぱら祭の機能に注目して他の要素ははじめから捨象してい

るので、筆者はここでカイヨワの不当を問題にするつもりは毛頭ないけれども、あえて古代の祭と、未来派の考える現代の戦争を比較するならば、最大の相違は、古代の祭には全くみられない大量殺戮の思想が未来派の戦争観に存在することだろう。大量殺戮の思想がどうして生まれたかは前節で述べた未来派の戦争観の骨子を知るだけで充分である。ベルクソンやニーチェの生命哲学に基づく社会的ダーウィン主義が無窮動の戦乱によって大規模な殺戮を必然的にもたらすことは明白だからである。

しかし未来派の戦争観は大量殺戮にとどまらず、ジェノサイドあるいは人類絶滅をもたらしうる点において真にそのアクチュアリティが存在すると思われる。この問題は現在の筆者の能力を超えた大きな問題と思われるので、ここではごく簡単に私見を述べ、問題の所在を示すだけにとどめたい。

第1の問題は技術に対する楽観的な、あるいは殆ど盲目的な信仰である。これは主に後進的環境によるものではあるが、それだけではない。

彼らは機械文明による人間の意識の変革に期待し、かつ人間の非情化あるいは機械化を推進した。マリネッティは『世界の健康法』（1915年）という小冊子で「われわれは非人間的タイプの創造を望んでいる」と露骨に書いている。「彼らは無尽蔵の生命エネルギーを腐敗させ毒するだけの道徳的悩みや善意や愛情そして恋を捨てるだろう」「遍在するスピードに応じてつくられた非人間的で機械的なタイプの人間は当然のことながら冷酷で全知で戦闘的であろう。」⁵⁴⁾

殺戮のための生命の燃焼は生命を愛する道ではありえない。彼らの反ヒューマニズムは機械と死への愛にとりつかれたとしかいえない。ここには彼らの美意識が介在しており、断定はできないが、サンボリズムに内在したデカダンスの影響も考慮すべきであろう。

E. フロムは未来派創立宣言のうちに典型的なネクロフィリアの思考 (necrophilism) を見ている⁵⁶⁾ が、筆者も全く同感である。このような人間疎外の思考をひきおこす矛盾とは何であろうか。すでに触れたが、やはり技術と人間のあいだに存する矛盾であろう。デ・ミケーリによれば、ポッチョーニとカルラ(二人ともアナキストであった)を除いて未来派の指導者はみな技術の進歩を人

間の進歩と同一視したという。⁵⁷⁾ 機械に支配される人間の運命について彼らは全く盲目であった。

第2に、この根本的矛盾は社会の所有関係に結びついている。

イタリアの未来派と異なり、ロシアの未来派は機械に支配された人間を知っており、機械の奴隷の位置から人間を解放するには社会革命が必要であることも知っていた。マリネッティがファシストになったのに、マヤコフスキーはボリシェヴィキになった。⁵⁸⁾

マリネッティにこのような認識を不可能にさせたものは何か。すでに述べたように、それは未来派においてイタリアとロシアを分つ戦争の論理であるが、究極的には美意識であったと思われる。1936年に彼はこう述べた。

「われわれ未来派は、27年まえから戦争を醜悪なものだとする考え方に反抗してきた。……われわれはここに改めて確認する……戦争は美しいものである。なぜなら、ガスマスクや威嚇用拡声器や火焰放射器や小型戦車によって、人間の力が機械を支配していることを証明できるからだ。戦争は美しい。なぜなら人間の肉体を鋼鉄につつま夢がはじめて実現できるのだ。戦争は美しい。なぜなら、花の咲きみだれる野を、火をふく機関砲の焰の蘭でかざることができる。戦争は美しい。なぜなら、銃火と砲声、死の静寂、芳香と腐臭をひとつの交響楽に統一することができる。戦争は美しい。なぜなら、大型戦車や編隊飛行機のえがく幾何学的な図形、炎上する村落から立ちのぼる煙のらせん模様など、新しい構成の美が創造されるからだ」⁵⁹⁾

「人間自身の破滅を最高級の美的享楽として味わうまでになった」人間疎外の「極点」とベンヤミンは評した⁶⁰⁾が、この人間破壊と美の矛盾を招来した根本的論理は知性を排除する本能と直観の論理である。というのは、これまで検討してきたことから明らかなように、本能と直観だけが彼にとって美の視点であったからである。⁶¹⁾

要するに未来派における自己疎外のイデオロギーは、知性と根本的に対立する直観の美学に基づく世界観の当然の帰結であった。そしてこのような世界観に根本的に影響されたかぎりでは、ファシズムは「政治生活の耽美主義」（ベンヤ

ミン) となるのである。

註

- 1) 仏文のテキスト《Manifeste du Futurisme》in: B. Romani, *Dal simbolismo al futurismo*, Firenze, 1969, pp. 79-85; 伊文のテキスト《Fondazione e Manifesto del Futurismo》in: F. T. Marinetti, *Teoria e Invenzione Futurista*, a cura di L. De Maria, Verona, 1968 (以下TIFと略記) pp. 7-13; 邦訳は菊盛英夫著「文学的表現主義」東京1970年に抄訳がある pp. 48-51
- 2) Cf. M. De Micheli, *Le avanguardie artistiche del Novecento*, Milano, 1966; B. Goriely, *Le avanguardie letterarie in Europa*, Milano, 1967
- 3) 「マリネッティとムッソリーニ」「知の考古学」No.1 1975年所収
- 4) *Prime battaglie futuriste*, (1915) in TIF p. 201
- 5) M. Calvesi は同一とは断言できないが、ダイナミズムが未来主義の最も特徴的な、かつ有力な見地であることを確認している。 *Le due avanguardie, I. studi sul futurismo*, Bari, 1975, pp. 131-2
- 6) L. De Maria, *Introduzione a TIF*, p. xxix
- 7) マラルメとランボーについては cf. De Maria, *Introduzione*, op. cit.; G. B. Nazzaro, *Introduzione al futurismo*, Napoli, 1973, pp. 17 sgg.; サンボリズム全体については、マルセル・レイモン著、平井照敏訳「ボードレールからシュールレアリズムまで」東京1974年参照
- 8) *Distruzione della sintassi* (1913) in: TIF p. 57
- 9) 1915 *In guest'anno futurista*, in: TIF, p. 282 イタリアで未来主義を必要とした理由は、創立宣言では、イタリアを「大学教授、考古学、術学のおしゃべり、骨董屋という悪臭を放つ壤疔から解放しようとした」ためとある。
- 10) E. Gentile, *Le origini dell'ideologia fascista*, Bari, 1975, p. 109
- 11) グラムシは1921年1月5日の「オルディネ・ヌオーヴォ」紙で、前年夏のコミンテルン第2回大会におけるルナチャルスキーの発言——マリネッティは知識人の革命家である——をとりあげ、ルナチャルスキーの評価を肯定して次のように述べた。
「未来主義者はブルジョワ文化のヘゲモニーの破壊を断行した。彼らは、自分たちの活動から生まれた新しい創造が全体として破壊されたものに優る仕事かどうかを考慮することなく、破壊し、破壊し、破壊した。彼らは、われわれの時代、強烈で騒乱の生活に満ちた大工業と労働者の大都市の時代が、芸術、哲学、風俗、言語の全般にわたって新しい形式をもたねばならないという明確な観念をもっていた。彼らは明瞭に革命的な、絶対的にマルクス主義的なこの見解をもっていた。しかるに当時、社会主義者はこのような問題に少しもとりくまなかったばかりでなく、政治と経済の分野においてさえ、同様に明確な観念をもたず、国家と工場においてブルジョワ権力機構を一掃しなければならないという考えには恐怖の色を示したのである。文化の領域において未来主義者は革命家であり、創造的労働者に等しい。おそらく労働者階級は、未来主義がなしとげた以上のことを、より多くの年月をかけても達成できないだろう。」A. Gramsci, *Marinetti rivoluzionario? ora in: id., Socialismo e fascismo*, Torino, 1966, p. 22.

未来主義のこの見解が「絶対的にマルクス主義的」であったかどうかは疑問である。

トロッキーは、ロシア未来主義に関する限り、彼らの革命性はブルジョワの知識人の「閉鎖的小世界のなかの嵐」にすぎず、マルクス主義者の革命的伝統をも認めない彼らの伝統否

定のなかには「ボヘミアンのニヒリズムはあってもプロレタリアの革命性はない」と断定しているが、これはおそらくイタリアの場合にも多かれ少なかれ妥当する評価であろう。しかしトロッキーは「詩的言語の根本的浄化」という革命的業績は評価している。L. D. トロッキー著、内村剛介訳『文学と革命』1、東京、1966年、118ページ以下。

とにかく文化革命を特別重視するグラムシは、新しい産業技術の時代に照応する新しい文化形成の探求と、とりわけそのための旧文化の破壊作業とにおいてマリネッティたちが果した革命的役割を高く評価したことは注目されてよい。上の引用文でも、グラムシはいささか未来主義的に、「破壊する」という不定法の動詞を三度くり返して用いている。

新しい美意識について補足するならば、ルナチャルスキーは、当時ヨーロッパとロシアの知識人にとって美学上の権威であったラスキンが風景を害うとして鉄道や工場を嫌悪していたと指摘しているが、ラスキンのこのような態度——過去主義——は今世紀初頭にあつては多くの芸術家や批評家によって支持されていたのである。芸術のために来るべき社会から一切の機械工業を排除して、それに手工業をおきかえるというウィリアム・モリスの後向きのユートピア思想に同意しない人々にあつてもデリケートな美意識は現実からはるかに遅れるものである。時代の新しい美について、ルナチャルスキーはグラムシとともに未来主義の観点を支持して次のように述べる。

「火焰を吐きつつある工場はわれわれにとって醜とは見えない。製造所の煙突において、われわれは益々多くの独特の美を認める」「われわれは遠くへ走り去る列車を一種の興味と純然たる美的感動とをもって眺める」と。さらに彼は「産業と芸術の密接な結合」を要求している。ルナチャルスキー著、昇曙夢訳『マルクス主義芸術論』『社会思想全集』42巻、東京、1929年、所収 第2章参照

- 12) 「未来主義がイタリアに生まれ、ロシアに構成主義として定着したのは偶然ではない。両国ともいくつかの面で後進国であり、前資本主義的農業経済と都市にのみ集中する始まったばかりの工業化という鋭い経済的矛盾をかかえていた。」Nazzaro, op. cit., pp. 28-29
- 13) Goriely, op. cit., pp. 145-146; De Micheli, op. cit., pp. 69 sgg.
- 14) Guerra sola igiene del mondo, in: TIF p. 249この態度が註11)のグラムシの評価にかかわる重要な問題提起であったことはいうまでもない。
- 15) 拙稿 前掲論文 142-143 ページ
- 16) 1915 op. cit., in: TIF p. 284
- 17) 「ドイツ文明は機械的か抽象的かいずれかである。」「ドイツ思想は思想でなく、公式であり形式主義である。」La cultura italiana del '900 attraverso le riviste, vol. 4, a cura di G. Scalia, Torino, 1961, p. 342

これは1913年に「ヴォーチェ」誌から離脱して未来派に合流し、未来派の機関誌として「ラチェルバ」誌を創刊したパビーニの1914年の言葉である。「ヴォーチェ」との分裂の主因は同誌のクローチェの傾向であった。このクローチェをパビーニもマリネッティもドイツ的知性主義の代表とみなした。

- 18) ニーチェについてのマリネッティの知識は、ポール・アダムやロズニ・エネといったフランスのニーチェ主義的作家、イタリアではマリオ・モラッソやダヌンチオを通じて得られたRomani, op. cit., pp. 92 sgg.
- 19) De Maria, Introduzione, cit., pp. XLVIII, XLIX; サンボリズムとベルクソンの関係については、レイモン、前掲書および平井啓之「ランボオからサルトルへ」東京1972年参照；マリネッティの立場は次のベルクソンの一文に要約される。すなわち、「……絵画にせよ、彫刻にせよ、詩ないし音楽にせよ、芸術は実用に有効な象徴、因襲と社会とによって受け入れられている一般性、要するにわれわれから現実を隠しているすべてのものを取り除

- き、われわれを現実そのものと直面させる以外の目的は、なにひとつ持っていない。」「笑い」
「ベルクソン全集」3, 東京, 1965年所収 120 ページ
- バビーニは1910年にベルクソンの「形而上学入門」をイタリア語に翻訳・刊行しているが、大戦に至る数年間はソレルの影響ともあいまってベルクソン主義がイタリアで流行した。cf. G. Prezzolini, *Il tempo della Voce*, Milano-Firenze, 1960, p. 237
- 20) U. Boccioni, *(Moto assoluto + Moto relativo = Dinamismo)* in: *La cultura italiana*, op. cit., pp. 284 sgg.; ベルクソン「形而上学入門」全集7所収 参照。
- 21) De Micheli, op. cit., pp. 249, 252; ボッチョーニとベルクソン哲学についてのこの指摘は次の著書においても確認されている。R. Jullian, *Le futurisme et la peinture italienne*, Paris, 1966, pp. 64-71; Nazzaro, op. cit., pp. 161-162
- 22) 未来派創立以来のメンバーで、マリネッティを個人的にもよく知っているデ・マリニアによれば、マリネッティは他人の大きな影響を認めたがらず、反対に皮相な影響を認める傾向があった。Introduzione, op. cit., p. XLVIII
- 23) Ibid., pp. XLIII-XLIX; cf. Nazzaro, op. cit., p. 230
- 24) 「私はイメージの総体を物質と呼び、その同じイメージが特定のイメージ、すなわち私の身体の可能な行動に関係づけられた場合には、これを物質の知覚と呼ぶのである。」
「物質と記憶」全集2, 24-25 ページ
- 25) *Guerre sola igiene del mondo*, in: TIF, p. 262 なおベルクソンについては白水社版全集7所収の「緒論(第一部)」と「形而上学入門」、および全集4「創造的進化」を参照。
- 26) Cité par P. Andreu, *Notre Maître, M. Sorel*, Paris, 1953, p. 77
- 27) ベルクソン主義とプラグマティズムの行動主義に対する相補的役割については次の文献を参照。E. Garin, *Cronache di filosofia italiana (1900-1943)*, Bari, 1959; N. Bobbio, *Profilo ideologico del Novecento*, in: *Storia della Letteratura Italiana*, IX, Milano, 1974
- 28) A. Tasca, *Nascita e avvento del fascismo*, Firenze, 1950, p. 54
- 29) *Distruzione della sintassi, Immaginazione senza fili, Parole in libertà*, in: TIF pp. 61-62
- 30) 未来派創立宣言のうちにヨーロッパ現代芸術の創立を見出すG. ベンは「抒情的自我」というマリネッティと殆ど共通の作詩上の問題提起をしている。「抒情詩の諸問題」「ゴットフリート・ベン著作集」2, 東京1972年所収, 参照。
- 31) 平井前掲書の第2章「ベルクソンとヴァレリー」参照
- 32) Cf. C. Bo, *La nuova poesia, II La rivoluzione mancata del futurismo*, in: *Storia della Letteratura Italiana*, op. cit., pp. 272 sgg.
- 33) 拙稿 参照
- 34) ベルクソン「時間と自由」全集1所収参照。なお、マリネッティのこの文章を含む段落に付けられた小見出し「自由語」とは、直訳すれば「自由における言語」(*Le parole in libertà*)となる。TIF p. 61
- 35) G. Sorel, *Réflexions sur la violence*, Paris, 1972, pp. 34-35 但し初版は1908年で未来派宣言の数ヶ月前である。なお伊訳である *Considerazioni sulla violenza*, Bari, 1970 (rip-rint) には讚辞に満ちたクローチェの推薦的序文が付されている。ベルクソンの文章の訳は「時間と自由」全集1 211 ページにある。
- 36) 1932年の「ファシズムの理論」においてムッソリーニは「戦争だけが人間の全エネルギーを最大の緊張に導き、戦争に立ち向かう勇気をもつ国民に高貴の印を刻印する。他のすべての試練は代用品であって、生死の二者択一において人間を自己自身に直面させることはな

い」と書いている。

- B. Mussolini, *Dottrina del fascismo*, in *Opera Omnia*, XXXIV, Firenze, 1961, p. 124
- 37) Nazzaro, op. cit., p. 15; Goriely, op. cit., p. 55
- 38) *Democrazia futurista* (1919), ora in: TIF pp. 385-387
- 39) 拙稿 前出参照
- 40) TIF p. 386
- 41) *Futurismo e Fascismo* (1924), ora in: TIF pp. 432-433
- 42) *Guerra sola*…… in: TIF p. 250
- 43) *Ibidem*
- 44) TIF pp. 258, 433, 217
- 45) A. Lyttlton, *Introduction to Italian Fascism—From Pareto to Gentile*, London, 1973, p. 137
- 46) TIF p. 386
- 47) *Ibid.*, pp. 287-288
- 48) *Ibid.*, pp. 306-307
- 49) *Ibidem*
- 50) *Ibid.*, p. 288
- 51) ユンガーの著作に直接触れることはできなかったが、次の文献に紹介がある。脇圭平著『知識人と政治』東京1973年、八田恭昌著『ヴァイマルの反逆者たち』京都、1981年、F. ショーナウアー著 小川・植松訳『第三帝国のドイツ文学』東京1972年
なおマリネッティ、ユンガー、ムッソリーニ、ヒトラーの戦争観は根本的に共通である。ちなみにヒトラーの見解を紹介しておく。「戦争は最も自然なもの、最も日常的なものである。戦争は常にある。至るところにある。始まりもなく、講和条約もない。生は戦争である。あらゆる格闘は戦争である。戦争は本源的状態である。原始的な行動にもどろろではないか。」H. ラウシュニング著 船戸満之訳『永遠なるヒトラー』東京1968年 24ページ
- 52) R. カイヨワ著小苺米現訳『人間と聖なるもの』東京1969年247ページ以下、および同じ著者の『戦争論』秋枝茂夫訳 東京1974年参照
- 53) Cf. M. Isnenghi, *Il mito della grande guerra*, Bari, 1970, pp. 169 sgg. なお、文明と本能の問題については、H. マルクーゼ著 南博訳『エロスの文明』東京 1958年、参照
- 54) 拙稿 前出 138ページ以下参照
- 55) TIF p. 255
- 56) E. フロム著 作田・佐野共訳『破壊』下東京、1975年552ページ以下参照
- 57) De Micheli, op. cit., p. 246; Nazzaro, op. cit., p. 337
- 58) Cf. Goriely, op. cit., p. 148-149;
- 59) W. ベンヤミン『複製技術時代の芸術』東京1970年45ページより再引用
- 60) 同上46ページ
- 61) ベルクソンにより忠実であったポッチョーニは知性を絶対的に排除することはなかった。II節の「造形的ダイナミズム」を参照のこと。